

|         |            |
|---------|------------|
| 漢法苞徳塾資料 | No. 112    |
| 区分      |            |
| タイトル    | 湿をめぐって     |
| 著者      | 八木素萌       |
| 作成日     | 1992.10.11 |

### ◎湿と飲と痰

摂取した水分が、生理的に正常な体液成分に変化しているものが、「津液」とされている。しかし、このように「津液」に転生しきれなかったもの、つまり、生理的に正常に機能できない状態の「水分」は、「湿」と「飲」と「痰」として病候的・病因的に現象する。それで「一源三岐」と言われるのである。

「湿」は粘着性・停滞性・沈濁性が有るものであり、「湿熱」と「湿寒（寒湿と言うことが少なくない）」がある。「土」性であり卑湿で籠りやすい。また季節の気としては「長夏の気」であるので、籠った卑湿は熱と合して「夏の異常な蒸し暑さ」のように「湿熱」となりやすい。また「異常に蒸し暑い」ので「涼・冷」を求めすぎて「湿寒」を招くと言う失調を生じやすい。

### ◎湿症

「内湿」と「外湿」の区別がある。

「外湿」とは「六淫」の邪の一つの「湿」に侵襲された「病」である。湿度の高い季節に影響されたもの・シトシト雨の湿度に当てられたもの・湿度が高い季節や環境条件のもとで水に漬かりながら作業して「湿」に当たったもの・川を涉ったり沢上りをしたりした為に「水湿」に侵されたもの・湿度の高い場所に生活していて「湿」に侵されたもの、これらのような場合の「湿症」は「外湿」の病である。

「内湿」とは、病理的な産生物が「湿邪」となって現病の病因となっている状態のものである。これは飲食や起居動作が不正である場合、或は、体質が虚弱である為の場合、また、慢性疾患による為の場合、などに体内から形成される「湿邪」なのである。「内湿」の多くは、飲食の不摂生による、それは、冷たいものや生ま物の過剰な摂取、飲酒・濃厚なものや甘みが強いもの等の摂り過ぎによる。

◎「湿症」は以下の三つに分類して考える。

- ①（Aタイプ）→「寒湿」が脾の機能を傷めているタイプ
- ②（Bタイプ）→「熱湿」が中焦（脾・胃・大腸）に鬱滞して発症したタイプ
- ③（Cタイプ）→「脾虚」のため湿が生じて停滞している病症のもの

これらの三タイプの、症候・舌状・脈状・主な治療薬方を以下に紹介する。

#### A タイプ……寒湿が脾の機能を傷めている

##### 〈発病の機作〉

- a. 多くは冷たい飲食物をむさぼり（生物や果物なかでもウリ類の摂り過ぎ）その為に「寒湿」が中焦に停滞したもの。
- b. 湿度が高い場所に長期間生活したり、無理に霧露や強い雨を冒すような事があったりして、「寒湿」が対に内を侵すに至っているもの。
- c. もともと内湿を持っているものが、脾胃（中焦）の働きを低下させる事があったので、「胃は陽気の源」と言われているが「陽気」不足が増悪するから内湿が「寒湿」に転化したり「寒湿」を生じたりしているもの。

##### 〈症候〉

身体がボツテリと重く感じたり、また、腫脹したりする。頭には何かを被せられているかのように重く鬱とうしい、食欲は無くムカツキ吐き気がある腹が張って苦しい、腹痛して溏便（ベタついた下痢よう便）する。

##### 〈舌候〉

口は淡白で渴きを覚えることは無い、唾液はむしろ薄く多い。舌苔は白膩である。

##### 〈脈象〉

濡緩の脈状である。

##### 〈治則と主な薬方〉

温中化湿の方法で治療する。主な薬方は「胃苓湯」・「実脾飲」の類。

##### 〈鍼灸の治療〉

#### B タイプ……熱湿が中焦（脾・胃・大腸）に鬱滞して発症

##### 〈発病の機作〉

- a. 多くは「湿熱」の外邪を受けたもの。
- b. 飲食の不摂生（つまり濃厚な味の美食の過多・甘いものの過食・酒の暴飲・乳製品類の過食）の為に、脾胃に負担を掛け過ぎているが、まだ脾虚にまでなっていないので胃は熱を帯びて来る、しかし、食物性質の湿は停留するので、胃脾に「湿熱」を引き起こして発症したもの。

##### 〈症候〉

胃脾が痞かえ腹が張って苦しく、ムカついて食思は不振である。口は粘って苦く口渴するが飲み物を欲するわけでは無い。尿の色は濃くなり、便通は今一つ爽やかさに欠けたり臭時には溏便する。或は、顔や目や皮膚等に発黄し、或は、皮膚に痒みが出たり、或は、身熱して熱は起伏し発汗させても解熱しない。

## 〈舌候〉

舌苔は黄膩であり、やゝ厚みを帯びて行く傾向。

## 〈脈象〉

濡数……注意を要する点は、「湿熱」の場合には「湿」の沈濁性・粘着性・停滞性と言う性質を反映するので、胃に熱を生じているのに、この「陽明の熱」は意外にも「やゝ中熱気味の微熱」や「中熱」が停留して「稽留熱」の姿を見せている事が多い。それが「濡」として反映されているのである。

「数」でもその程度はたいしたことでは無い場合が多い。「浮」いている場合でも「中脈」として触知される感じであることが多い。「胃」＝「陽明」の脈位〈浮中沈では中、寸関尺では関、右関〉が主軸に反映される脈状である。

## 〈治則と主な薬方〉

清熱化湿の方法で治療する。主な薬方は「連朴飲」・「甘露消毒丹」の類。

## 〈鍼灸の治療〉

## Cタイプ……脾虚のため内湿が停滞している病症

## 〈発病の機作〉

- a. 「脾」の基本的な生理機能は「運化・敷散」であるが、飲食の不摂生が続いた結果「脾・胃」が損傷されて「脾虚」になってしまい、その結果、体内に「水湿」が生じ停滞して発症しているタイプである。

## 〈症候〉

顔色は萎黄色となり（栄養失調や貧血の場合のような顔色）、メンタルな面（精神的・情緒的～気分）はひどく落ち込んでおり、体調も全般的に低調である。身体の重苦しく倦怠感はげしく・四肢もまた重い。腹は不快で伸びやかでは無く、食思の不振が激しくて食べ物を嚥下したくない程である。特に脂っこいものや濃厚な味のものを嫌う。大便は「薄い溏便」（緩いベタベタした便状）であり、或いは、排瀉（下痢）する。

## 〈舌候〉

舌苔は薄いが膩であり、舌質は色淡くムクんでいる。

## 〈脈象〉

濡細の脈状である。

## 〈治則と主な薬方〉

健脾化湿の方法で治療する。主な薬方は、香砂六君子湯の類を用いる。

## 〈鍼灸の治療〉

## ◎湿に対する鍼灸治療の全般的な問題について

- (a)「湿」は「土」である事に関連して、「湿」邪の病を治療する上では重要な問題がある。食事で摂取した「水」が「気血津液」と呼ばれている生理的に重要な体成分に転成して行く仕組みを、何が・どのように・どの程度に・狂わせているのかを認識し診定して、「水を気血津液に転成して、生理的に重要な体成分としてその機能を果たさしめる仕組み」を回復させる為に、必要な処置を行なうのが、「湿」邪の病を治療するということである。
- (b)「湿邪」は土性であるから、「外感病」であっても「内傷病」であっても、脈口左右を診る「脈口での人迎気口脈診」では、どちらの場合でも、「右の関」上に「濡」の脈として摸ることが出来るように現われる。また、手掌と手背の温度比較による「内感」と「外感」の判断の方法でも、手掌温が手背温よりも温かいと言う「内感」に感じられるように現われる。この事は、施術の補瀉技法の選択の相違と、選穴の場合の補瀉の相違、この問題への正しい対処の為に、明確に解決しなければならない面倒な臨床的かつ理論的な課題である。あらゆる診断技法と弁証方法論とを縦横に総合的に運用して、「湿病」の場合の病因の「内外」と「病の虚実」とを明らかにしなければ「誤治」の危険を犯してしまう事になる。

- (c)臓腑経絡の機能（治療的に運用する場合に必要な側面）については、

|      |                              |
|------|------------------------------|
| 肺    | 気・治節・肅降作用・水の上源               |
| 三焦   | 決瀉の官・水の気化・元気の別使・胃大腸などの機能を支える |
| 大腸・胃 | 消化・吸収・通過・排泄                  |
| 脾・胃  | 敷散・運化                        |
| 肝・胆  | 条達・血を臓す                      |
| 腎    | 二便を主る・元氣、精を蔵す・水の気化・三焦を介して消化管 |
| 膀胱   | 蓄水・水の気化                      |

- (d)五邪論との関連では、虚邪（心～火）・正邪（脾～土）・実邪（肺～金）・微邪（腎～水）・賊邪（肝～木）となる。

- (e)「脾は甘きを喜び苦きを惡み、また、燥を喜び湿を惡む」について、甘いとは薬の場合では「補薬」の基本的な薬味であり「緩」＝クツロギ（寛）を与えるものである。「苦」は「心・火」の味であり、また、「勞苦・苦勞」「苦い思い」の「苦」でもある。これは、將に心身を困憊させるものである。「燥」と「湿」とは対概念であるが、「燥」は「金」氣であり「子」の氣で「喜」むものである・「苦」は「火」味で「母」の味で「惡」むものである。

この事は「味」においては「母」（火～心～苦）は問題性を孕んでいると意識されている事を、また「氣」においては「子」（金～肺～燥）は有用・必要であると意識されている事を顕わしていると言えよう。

『素問』生氣通天論第3に「…味過于酸 肝氣以津 脾氣乃絶… …味過于甘 心氣喘滿 色黒 腎氣不衡…味過于苦 脾氣不濡 胃氣乃厚…」とある。

「潤」と「湿」は異なる概念で、「潤」のイメージは良いが「湿」のイメージは悪い。上の文の「肝気以津」の所の「津」は、形容動詞として使われているので、「津々として」の場合の「津」である、《【水びたしになるので】という訳よりも【ヒタヒタと水が迫ってくるように肝気が脾を剋する為に脾気＝脾の役目・機能＝が絶えてしまう】という訳の一部としての「津す」である

(f)「湿の病」と「脾の病」～病因としての「湿」と、病症としての「湿」について、

(h)「腫」と「脹」

(i)「体重節痛」

(j)「痺」について